

■第 130 回 み言葉に生きる招き 《解説と黙想》

●第 1 朗読 エゼキエル書 37・12～14

イスラエルの民の骨は枯れ、望みは失せ、われわれは滅びた。(エゼキエル 37・11) と嘆き^{なげ}悲しみ、死んだも同然の民に「枯れた骨の谷の幻」(エゼキエル 37・3-10)をエゼキエルは語ります。この箇所では、バビロン捕囚となったイスラエルの民に回復の希望を与え、国の再建では神の力を示し、絶望の底から霊的な復活により、民との契約を成就させ、民に主の存在を示します。民は滅びた、と絶望した時こそ、神の主権による救いを宣言されました。神はエゼキエルに、神の代弁者となって彼らに語ります。国は滅び、民の希望や信仰は消え失せ、死の状態が墓と呼び、神はこの墓を開き、死の支配から一方的な救出が墓から引き上げと言ひ、国への帰還と民との契約の回復で、イスラエルの地へ連れ戻します。民は捕囚にされ、神に捨てられたと感じていた民に、神は強い愛を示されます。神はこの書では何度も、わたしが主であることを知れ、と繰り返され、主を深く知ることこそが救いです。風や息が霊で、神が息を吹き込んで人が生きた(創世記 2・7)ように、神が霊を吹き込むことで、民は肉体的・霊的にも新しく創造されて生きます。神との契約の成就が自分の土地に住まわせることで、神はこれを語り、これを行うことで、神の主権と真実を示されます。 【著者の一言】日々の歩みを当たり前と思い、主への思いが希薄でした。

●第 2 朗読 ローマの教会への手紙 8・8～11

パウロは、すべての人は罪の配下であり、律法による行いではなく、信仰によって義(信仰義認)とされ、イエスの十字架の死で、神との和解が成立しました。人は弱さゆえに罪を犯して惨めな思いを抱きます。感情や肉体、自己中心的なことを肉と言ひ、この方向に生きることを肉の支配下にあると呼び、神とは断絶した状態にいますので、神はこの者を喜ばれない。神の命や聖霊を神の霊と言ひ、これが人の内に内在し、感情に支配されていない状態を霊が内に宿っていると呼び、聖霊に生かされ変えられると、霊の支配下にいると言ひます。人は霊によって新しく造られる者となり、(2コリント 5・17)この環境にいて、主の証人となります。(使徒 1・8)神の霊とイエスの霊とは同一で、この霊・命が信者の内(魂)に宿ります。所有関係にあるのが属すると言ひます。救いは肉か霊かのどちらの支配下に属するかで決まります。肉体はやがて朽ち果て滅びます。神と正しい関係になって義とされ、霊的な命の始まりにより、霊は義によって命になります。神は霊が、信者の内に宿り続けるのを希望されておられます。パウロは繰り返し、霊が内に宿っているのを語るの、これが救いの根拠となるからです。今は死に向かうはずの体も、人は朽ちる体のためではなく、内に宿る神の霊により、与えられた命を復活に向かわすために生きます。

【著者の一言】永遠の命を生きるために今を生きます。

●福音書朗読 ヨハネ 11・3～7、17、20～27、33～45

この箇所では次の 3 点が語られます。①イエスが復活であり命である。②人が極限状態にあるところへ、神の栄光を現し、救いへと導く。③多くの者がイエスを信じて信仰に導く。ここで登場するマルタ・マリア・ラザロの三人の家族は、主と共に生きる教会の姿と信仰のありようを示します。①マルタは、(活動的で仕える信者)イエスを神の子キリストですと告白します。②マリアは、(黙想し聴く信者)主の足元にひれふします。③ラザロは、(主の証人となる信者)受け身の人であり、神の栄光になるには死が終着点とはならず、イエスが神の子であることを現すことが、栄光のためと呼びます。ユダヤ教では、世の終わりの日に、復活すると考えられており、イエスは今、わたしは復活であり、命であると宣言されました。肉体の復活は未来の出来事ですが、イエスによってすでに始められた現実における永遠の命は今、私たちの内に注がれています。肉体が減びても神から与えられた命は失われず、世の終わりの日に、私たちはイエスが復活された姿似姿に変えられます。イエスと結ばれた者は、永遠の命を生き続けるので、主を信じる者は、決して滅びることはない。イエスは死と不信仰への怒りで、^{いらい}憤りを覚えて興奮され、人の悲しみを共感されて涙を流します。従順な信仰によって神の栄光を見ることが出来ます。ラザロの復活の奇跡は、群衆に留まるだけでなく、イエスがメシアであるとの正体も明らかにさせ、信じさせるためなのです。

【著者の一言】両親を通して、この奇跡に導かれたことに深く感謝します。

著者 蒲池 明憲